

稲荷神社の初午祭

柴田 源三郎

敦賀市山区のことしの初午祭（本来は御供祭^{まゐりまつり}という）は三月四日（旧初午）である。

昨年の秋から敦賀ライオンズクラブの会員有志と市内の伝統行事とか民俗芸能について調査しているが、山区の初午祭の起源についてまとめてある冊子を入手したので、同区役員^{いんぎん}の了解を得てここに紹介したい。

一 人身御供の起源

むかし、あるとき山村（山区のこと）の在所に住んでいた作兵衛の娘が洗濯物を持って黒河川へ行ったきり夕飯時になっても帰って来ないといつて、忽ち村中大騒ぎになった。

ちようどそのころ村人達が汗水流して育てあげて、やっと収穫できるように捻った作物を夜中に喰い荒したり、果物の枝を折って手当たり次第荒し廻る怪物が夜ごとに出没するので、村人達が集まって寝ずに夜廻りをしよ

うと相談していたのである。

「一体何物の仕業か、イノシシかクマかサルか」村人達は必死になって足跡を調べることが分らないという始末。そこへ娘が行方不明になったといふので、怪物が人間にまで危害を加えるとは何事かといふことで、一層騒ぎが大きくなつた。

まずは作兵衛の娘を探し出そうといふことが決まり、村中総出でタイムツを持ち鐘や太鼓を叩きながら「おまつヤーイ〜〜〜」と大声で一晩中、村中はおろか山の方まで探し廻つたが、おまつ^{おまつ}の持ち物すら見当たらず、誰も彼もすっかり疲れ果ててしまった。そこで村人の一人が「どうや苦しい時の神頼みといふことがあるが、氏神様（稲荷神社）に伺いを立ててみては」と提案したので、全員が賛成し村人の代表が氏神様に参拝して、おみくじを引いたところ「毎年の初午に人身御供として娘をお供えせよ」といふ啓示が出たのである。一同は意外なお告げに無言のまま顔を見合すだけ。するといつも皮切りに発言する男が

「バカなおみくじや、そんなことがあるも

んか。これや例の怪物の仕業に違いない。

第一人身御供に出る娘なんか居るもんか。

娘を捧げる親なんか居るもんか」

と、わめき散らすだけであつた。

そして二、三日過ぎると、また〜五郎三郎の娘と八郎太夫の娘二人が夕暮れになつても帰って来ないといふ事件が起こつた。再三の出来事で村人達は恐怖のため不安な日夜を過した。中良策も浮ばない状況の中で一人の若者が

「愚痴や理屈を言っている場合ではない。

みんな山狩りをやろう、結果が最悪にな

つたらその時こそ最後の手段を選んで

と提案したので、全員が賛成して早速山狩り

を行うことになつた。

二日二晩村総出の山狩りの甲斐もなく、村人達はくたくたになつて疲労を重ねたに過ぎなかつた。そこで最後の切札として村中の総寄りを行い

○おみくじどおり人身御供の娘を奉納する

○村中挙げて他の土地へ移住する

○このまま村のつぶれるまでがんばる

いずれか一つを選んでくださいと持ちかけた

が、これも相変らず決まらず無言のままに終ろうとしたが、ある一人の男が言うのには

「これまでさらわれた娘たちの遺体も足取りもわからない。衣類の端切れも見つからないというのは、考え方によつては神様の寵愛を受けながら安住しているのではなからうか」

と切出したところ娘の親たちも「娘が今なお生きてるように思っている」と言う。すると別の村人が「まことに言いにくいことであるが……」と前置きして

「さらわれた娘たちは今なお神様のお傍で無事でいると良い方に解釈し、毎年初午の日に人身御供をいたしますと神様に誓いを立てて、娘を差し出すことに決めてはどうだろうか」

と申し入れたところ、これも論議が百出したが、かといつて全貫村を離れても先行はなし、怪物に掻き廻されて村のつぶれるのを待つ訳にもいかんと詰めの論議に傾き、人身御供の件は賛成多数で決まり、奉納の順番はじ引きとすることで翌年から実行することに決定した。さし当たり今年が村一番の長者である

庄屋の源右衛門が当番となったが、それから庄屋一家は毎日身の細る思いで過していた。月日の過ぎるのは早いもので、初午がいよいよ明日と迫つたので、庄屋では朝早くから

親類縁者、知人そして村人達大ぜいが訪れてごつた返しうちにその日も夕暮れになると、一層寂しさが漂い最後の別れの宴が開かれた。

いよいよ明日は人身御供と覚悟している娘は、別れのあいさつを静かな口調で始めた。

「父上様母上様、しばらくでしたが可愛がって頂きほんとうに有難うございました。

親戚の皆さんや村の方々には何かとお世話になるやら、可愛がって頂くやら毎日を楽しく過して参りましたのも皆さんのお蔭と存じ、心からお礼申し上げます。私は今日まで人間として生まれたことを感謝しております。短いあいだで皆さんとお別れすることは寂しく思います。両親はじめ皆さん方にご恩返しもせずに旅立つことを心苦しく思っています。もし私が神様のお傍で過させて頂くことになりましたら、ご恩返しに皆さん方が毎日毎日達者で、しあわせに過されますようお願いいたします」と。

思わずその場に居合わせた一同は、あまりにも健気な娘の別れの言葉にワアワアと泣き始めたのである。

そのとき、玄關脇にいた女が一人の武士が訪ねて来たことを庄屋の源右兵衛に知らせに来たので、直ちに玄關まで出て「私がこの家の主人ですが……」と言葉をかけると、旅の侍は

「拙者は武芸修行のため諸国を旅している山中鹿之助と申す若者であるが、この先の在所で力競べをしている数人の元氣者と話し合っていたところ、当地では初午に人身御供と称して若い娘を奉納するとか、その日も明日だと聞いたので急いで参つた次第である」

と来意を告げたから源右衛門は早速奥座敷に案内して、人身御供について詳細に説明することにした。

源右衛門の話聞き終つた侍は

「神様が人身を求むるなんてことはない。

それは何か怪物の仕業と考えるから、拙者に人身御供の娘役を任せてくれぬか、必ず怪物の正体を見届けて参らす」と断言したので、源右衛門は村の者と相談しますと言つ

て台所に待っている村の衆に伝えると、誰ひとり異議を申し出る者はなく、「万事お任せしますからどうか私どもをお助け下さい」ということで、侍にお願いすることになった。

侍は村の衆が承知したので、一応念の爲氏神さんの境内を下見しておこうと、主人に案内させて稲荷神社へと向かった。庄屋の家に戻った侍は、夕食をすませたあと怪物退治の段取りを考えながら時間を過した。やがて真夜中が近づくと、侍は娘の姿に変装して金櫃の中に入り、お供え物とともに腰元（母役）並びに御供担によって稲荷神社の本殿に納めると、一同は正面に向かって拝礼して退出した。

金櫃の中に潜んでいる侍は、怪物は護身のため鉢にマツヤニ、ヤマウルシなどを塗って槍も太刀も通じないようにしていると聞いているので、目ざす急所は脇腹から心臓を狙うべく作戦を立てていた。

しんしんと夜はふけて一時は水の流れも止まると言われる丑の刻、境内に敷きつめてある玉砂利をザクザクと踏みしめて進んで来る怪物の足音が金櫃の近くで止まった。金櫃は

荒縄で括ってあるので、怪物は舌で唇をなめながらニタリと笑う。すばやく歯で荒縄を噛み切っている音が聞こえる。侍はエイッと身構えていると、怪物は金櫃に乗りかかるようにして蓋を向かう側に押し開けた。その瞬間

侍は全身の力をふるって怪物の脇腹へ一刀深く刺し込んだ。ギャアアと頓狂な声を出して飛び去る怪物を侍はすかさず追いかけたが暗闇で見届けられなかった。手答えは充分あつたし、怪物の返り血を浴びたことなども考え合わせて、目的は果たしたと一応確信して庄屋の家に戻り、源右衛門一家に事の次第を告げて夜の明けのを待つことにした。

やがてそのうちに東の空が明るくなり始めたので、侍は源右衛門に怪物の正体を確かめに行こうと促して稲荷神社へと向かった。本殿並びに金櫃には何ヶ所か怪物の血で黒ずんでいる。さらに怪物の逃げ去った跡には点々と血の固まりが落ちているので、それをたどって行くと約二丁ほどの所に大きな椎の古木があり、根元に大きな穴があつてその入口に目玉をむき出し、大口を開けて死んでいる怪物を発見した。怪物は大人ぐらいの頭の毛が

白っぽく、体じゅう白褐色の毛に覆われたヒザルであることを確認したのである。

庄屋の家では娘の命拾いと村中の大厄払いということで、座敷の正面に侍の席を設け村役その他一同がそれぞれ着座すると、源右衛門は威儀を正して

「この度はわが家に降りかかる大災難をお救い頂き、まことに有難うございました。なお村におきましても怪物を退治して頂いたので、今日からは枕を高くして寝むことができます。再び安穏な村に取り戻して下さいませ。末長くこの村にご逗留くださるようお願いいたします。」

また、村の衆に申しますが気の毒なことに命を失った娘さんが居られるので、その人たちの霊を慰めるためにも今後末長く祭りごととして残したいと思っておりますので、ご賛成賜りたいと存じます」と申し出た。

さらに「今日から三日間は私の方で食事一切引受けさせて頂きますから、腹いっぱい食べたり飲んだり思い切り楽しくお過ごしください」とお礼のあいさつを述べた。

それから三日目、侍は庄屋はじめ村の衆が引き止めるのを辞退して

「拙者のつとめも終ったことであるし、先を急ぐ用事もあるからこれにて失礼する」と言つて、お札の錢別も固辞し名残りを惜しむ村の衆に見送られて、再び修行の旅に出たのである。

二 烏帽子着の儀と当番の順位

山区にはむかしから稻荷神社の氏子中に二十人衆と言う宮座二十戸が存在する。そしてこの二十人衆が稻荷神社の一切の事を処理し、祭典の奉仕をすることになっている。二十人衆の頭は一老と呼ばれ絶対の権限を持つてゐる。

二十人衆への仲間入りは、一月十日の宮の行ぎこばいと初午当日の年二回烏帽子着の儀として行われる。まず登録希望者（資格者）が親または身元引受人に伴われて坐席に着き、「某の俸某が烏帽子着を致しとう存じます」と願ひ出ると、これを受けて二十人衆の頭がこの次第を着座者に伝え、適格者（確かに俸養子、婿養子等で家を継ぐ者）であると認めると、「こゝへ」と呼び寄せ大盃を交わして烏帽子

着の儀を終る。そして宮帳に登載されて順位が決定する。この登載順位により前年に当受けをした人が今年の初午行事を行うことになる。

三 初午祭の遺習

庄屋源右衛門が人身御供の霊を慰めることと、怪物を退治したことを起縁にお祀りすることを誓約して、その後御供祭は毎年続けて行われて来た。古い時代の記録は分らないが『敦賀郡神社誌』には特殊神事としてその大要が記述されている。なおその内容については昭和四十四年十一月発行の本誌第一四巻第五号（通巻七八号）に齊藤槻堂氏が「若越における人身御供考」の中に、初午祭として紹介されている。

ここでは当区の故山田孫兵衛さんが昔からの言い伝え聞き伝えを基にして、まとめられた「山初午祭祀原の語」に詳しく記されている古式どりの方法を紹介する。但し祭りの呼称については「神社誌」には御供祭と記されているが、復活後は旧二月の初午の日に行われることから初午祭と称しているので、以下これに従うことにする。

初午祭ま

での準備

今年の当番に当たった家では、春の初めから準備に取りかかる。まず宮田の荒起こしから田植え、草取り、刈取りまで一切がお祭り仕事で、その間親戚、友人、村人の協力で進められる。月日が過ぎて十二月になると、身欠きニシン一梱を干物問屋から買い込んで、それを親戚の女たちに頼んで一本一本水洗いしてから水を切つて、糞漬（ニシンのすし）にしておく。

家での準備は、親戚、友人の協力を得て新年早大掃除や片付けに忙しい日をおくる。初午一週間前になると、酒曳と称して大八車二台を大ぜいが曳いて、敦賀の町の造り酒屋・備前屋へ行き、当主が「山村から酒曳に参りました」と告げると、例によって酒屋の庭において腰掛けて利酒を頂戴する。ホロ酔い気分になって帰りは五斗ぐらいの酒樽を大八車に積んで、鼻歌を歌いながら二里半余りの道中を山村へと帰る。

初午祭の前日、お宮から当番の家へ「明日の品物を届けてください」という連絡が届く。お宮では届けられた品物で二十人衆並びに村人衆の賄いを使う。

納品目録

お宮では届けられた品物で二十人衆並びに村人衆の賄いを使う。

一 精米 四斗 一 精酒 四斗八升
 一 味噌 五貫 一 薪 一〇把
 一 炭 一俵 一 茶 半斤
 一 雑魚 百匁 一 鮮魚 一尾
 一 塩 一合 一 野菜 一盛
 一 鏡餅 一飾 一 豆腐 一〇丁
 一 神主の賄物……二重箱、折詰一箱
 一 神主御札……金一封

前夜祭

初午の前夜は午後七時ごろ、朝時元氣者が十名ほど、肩を組んで首を突合わせ気合の入ったところへ、一人の若者が摺り鉢に味噌、香料の混ぜたものを入れて飛び込んできると、そして摺り始めるとこれを奪わんとする村の衆と競い合いが始まる。何分酒が入りいきり立っているから喧嘩になることが多い。摺り鉢を無事に控え所（別当の家）に持ち帰ると朝時の勝ちということになっている。一方、当番の家では前日からお宮に籍のない大ぜいが詰めかけて、宵祭と称して酒を飲んでゐる。

当日招かれる御供担八名をはじめ人身御供の娘、母親代りに選ばれた腰元は、新風呂を

浴びて身を清める。娘、腰元は当番の家に残るが、男の八名は祝酒を戴き、別当の家に戻って参籠潔斎することになっている。

初午祭の日

早曉四時ごろから朝時の手によって、ご飯、汁などを煮る準備にかかる。二十人衆の中から選ばれた八人の御供担は、黒河川に入り冷水で身を清める（これを垢離掻きという）。水を浴びた御供担は焚火で鉢を温め、衣類をまとい神殿に参る。そのあと夜の明けるまで酒を飲みながら伊勢音頭など大声で歌う。各自の服装は白足袋に黒脚絆を着け、白緒の草履を履いて、稻荷神社の鳥居の前まで迎えに出る。持ち物は金櫃と称する桧製の大きな曲物櫃の中に、昆布（長さ二寸、巾一寸ぐらい）を丸く巻いたもの、蕨（長さ一寸あまり）数十本を束ねたもの二把と神酒および木碗に赤蒸しを廻し盛りにして、折敷にのせたものをに入れておく。それを白麻幕で張りめぐらし四人が担ぐ。あとの四人のうち二人は道開きと称して先導に、他の二人は後押しと呼んで後方に続く。

境内では老若男女の参拝者が大ぜい詰めかけ、とりわけ若い娘やお嫁さんたちには毎年のことながら衣裳競べとあつて張り切っている。

鳥居の前に勢揃いした行列の金櫃の幕内には縮緬の打掛けを着けた人身御供の女の子と、一張羅の晴衣を着けた腰元と称する母親代りの女が、八人衆に守られながら社務所から本殿へと向かう。

神前に参進して櫃内の供え物を献じ、五穀豊穰と無病息災を祈願する。人身御供の女の子とともに一同が拝礼して神事を終る。

そのあと、腰元や女の子および二十人衆が遥拝所に下りて着坐すると、八人衆が代る代る大声をあげながら余興をとり入れる。そして供えておいた赤蒸（赤飯の類）で小さな握り飯を多数作り、大きな飯櫃に入れて荒蕨でおおい、中央を荒縄でくりくり二名ずつが担ぎ込んで、参拝の群衆に与えるのをわれ先にともらい受けるのである。

大役を果たした八人衆は、二十人衆その他関係者とともに直会に出席する。



あとがき

はじめに断ったように、初午祭の起源とか前日までの準備については、一応古式のままだに記したつもりであるが、時代の変遷、区内の事情などによってかなり大きく変りつつあ



ると思われる。たとえば、当番宅での賄い事は多額の経費を要するから一切行わないとか、黒河川での水垢離は護岸工事で飛び込めないので、別当の家の前の清水を堰き止めて身を清めることなどかなり簡略されているが、昭

和五十三年、区内の有志により復活してからは本来の筋道をしっかりと守り、村おこしの一環として伝承されていることは評価すべきである。